

APEC-ISTWG Training Course 「Human capacity building for natural resources development and its environmental impacts」の実施について

地質調査企画室では、2007年11月26日(月)から12月15日(土)までの20日間、APEC研修を実施した。本研修はAPECプロジェクトの一環であり、昨年度、地質調査企画室がAPECに対して提案した研修案が採択されたものである。実施に当たってはAPEC基金を用い、今回の研修予算はUS\$50,000であった。研修生はAPECの加盟国から立候補することができる。10月19日に研修申し込みが締め切られ、韓国(2名)、タイ(2名)、中国(1名)、パプアニューギニア(1名)、フィリピン(1名)、ベトナム(2名)、ロシア(1名)の10名の研修生が決定した。ただし、フィリピンからの研修生は直前にキャンセルとなったので、実際に参加したのは9名である。

本研修の実施体制は地質調査情報センターが中核となり、プログラム委員会を立ち上げた。プログラム委員会は、プログラム作成、各講師依頼、テキスト編集およびAPECに対する最終報告を行う。また、講師についてはGSJのメンバーが主体となり、加えて他の機関(研究所、博物館、行政機関)に依頼した。

研修の初日と2日目の午前は、各参加国によるカンントリーレポート発表を行った。これは、APEC研修を実施する際に必須とされているものであり、地質調査総合センター内での一般公開の形式で行われた。各参加者が自国における資源探査、資源開発、それに伴う環境汚染や対応策について発表した。国毎に資源開発や環境対策の法整備が異なるため、一般聴衆のみならず参加者同士の質疑応答が活発にされた。

研修2日目の午後から、各講師による講義・実習が始まった。講義は17タイトルあり、その内容は、資源開発とそれに伴う環境汚染・災害、エネルギー資源、鉱物資源、地熱資源、メタンハイドレート、CO₂地層処分、水資源、砂・砂利資源、コンクリート構造物、土壌汚染、リスク管理IT技術、リモートセンシング技術など、多岐に渡っている。各参加者の専門分野は区々であるが、自分の専門分野に近い講義に関しては、講師に多くの質問をしていた。

12月1日(土)の午前中は「つくばツアー」を実施し、上高津貝塚や筑波山山麓にある古墳、筑波山神社、つくばセンターを案内した。アジア各国にも数多くの寺院があるが、日本の神社はそれとは大きく異なった雰囲気を持っているので、なかなか興味深かったようである。

また、17の講義の他に、2回の野外巡検を実施した。12月8日(土)は、地質調査所0Bの有田正史氏と鉱物資源研究グループの須藤定久氏の案内による、千葉県房総半島での砂・砂利採取現場と九十九里浜の海岸浸食に関する巡検を行った。房総半島で採取された大量の砂や砂利が羽田空港の新滑走路建設に使用されていること、また、汚水が採取現場の外部へ流れ出さないシステムや採取終了後の跡地利用計画などの説明を受けた(写真1)。一方、九十九里浜では2ヶ所の海岸を見学した。1ヶ所目の海岸は、波による浸食を受けて砂浜がほとんど消失してしまっているが、2ヶ所目の海岸は浸食を受けおらず、自然の砂浜が残っている。その理由は有田氏による解説で明らかにされたが、多くの参加者が海岸の保全や自然保護の観点から大いに関心を持ったようである。



写真1 房総半島の砂・砂利採取現場にて須藤氏の説明を受ける



写真2 日立市日鉱記念館にて。

12月11日(火)から13日(木)は2泊3日で、物質循環研究グループの丸茂克美氏の案内による山形県と岩手県方面における鉱山跡地に関する巡検を実施した。茨城県日立市にある日鉱記念館(写真2)、岩手県岩手郡の松尾鉱山事務所、秋田県大館市のエコシステム花岡(旧:花岡鉱業株式会社)を見学し、それぞれの鉱山跡地の利用形態について見学・解説を受けた。山形県と岩手県は、一部の道路が積雪のために通行止めとなるほどの厳しい寒さであったが、タイ、ベトナム、パプアニューギニアからの参加者は、生まれて初めて雪を見たということもあり、寒さをもとせずに野外現場を熱心に見学していた。

最終日の12月14日(金)は研修のまとめと研修の評価を研修生全員で行ったのち、厚生センター2階の食堂で終了式を行った。その中で、地質調査総合センター代表の佃氏から参加者1人1人に修了証書が手渡された(写真3)。

多くの方々のご協力を頂き、今回の研修は成功したと言える。反省点は、多少、スケジュールが過密であったことである。とくに、研修期間中の土曜日にもスケジュールが入っていたので、研修生も実施する側も、少々疲れたようである。

今回のAPEC研修は、地質調査総合センターにとっては初めての試みである。2008年度のAPEC研修もGSJの提案した案件が採択された。今回の反省をふまえて、来年度もより充実した研修を行いたいと考えている。また、本研修が参加した各研究者の研究の糧となり、今後はGSJとの間で国際共同研究につながれば幸である。



写真3 終了式で佃代表を囲んで記念撮影